

第1章 萩市の歴史的風致形成の背景

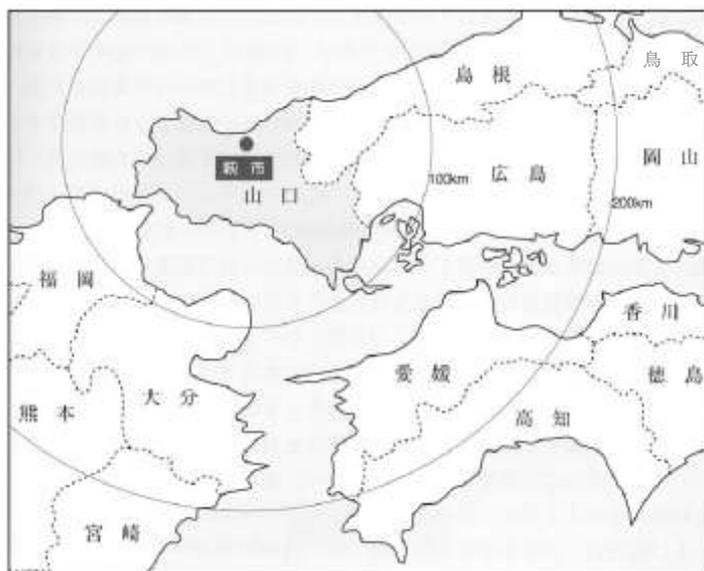
1. 自然的環境

(1) 位置

萩市は山口県北部に位置し、北部は阿武町を取り巻く形で日本海に面し、東部は島根県（益田市、津和野町）と接し、南部は山口市に、西部は長門市、美祢市に接している。

総面積は、698.31 km²で、県土の約11.4パーセントを占めている。延長35 kmに及ぶ海岸線は、北長門海岸国定公園に指定されており、沖合には面積7.74 km²の見島、3.01 km²の大島、2.43 km²の相島、0.74 km²の櫃島等数々の島が点在している。

市役所本庁所在地は、北緯34度24分29.2秒東経131度23分57秒に位置する。



萩市の位置



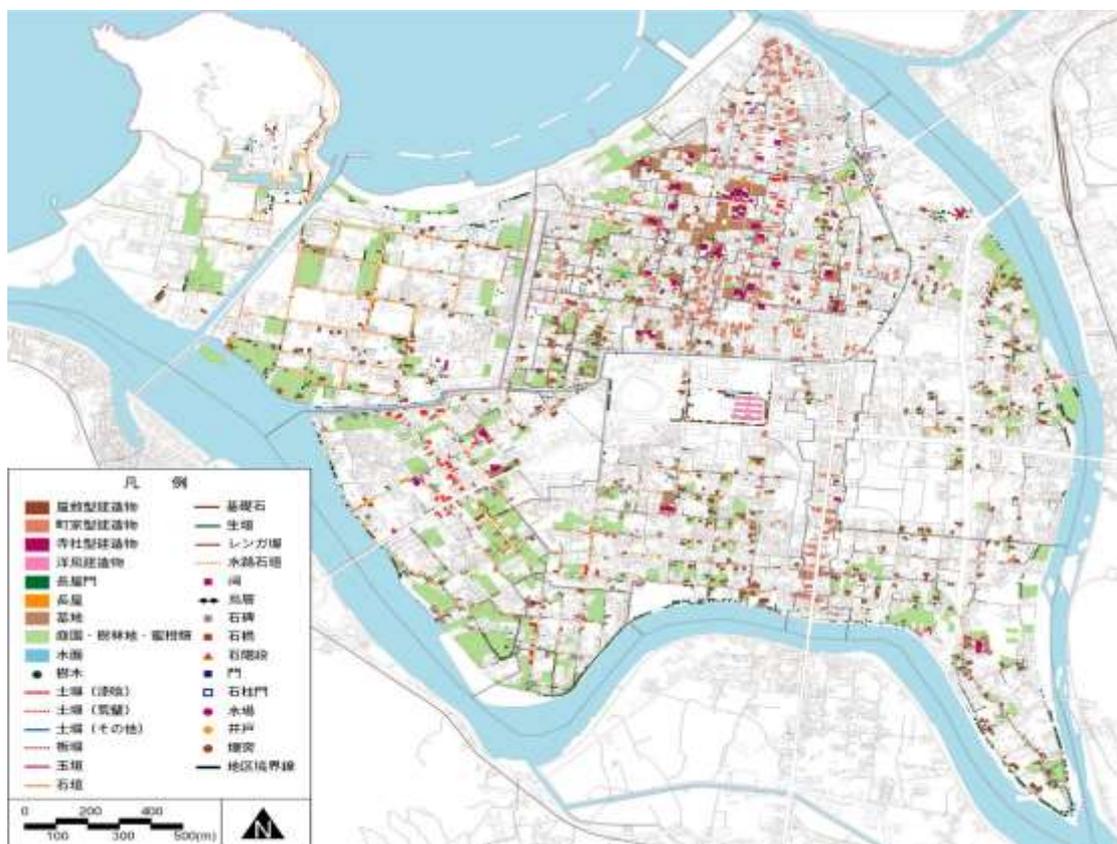
(2) 地理・地形

地形は全体として東部の中国山地から北西部の日本海に向かう傾斜地で、南部市境界付近に標高700mを超える山々が連なっている。低地は少なく、阿武川河口部に形成された三角州にある旧萩市街地部とその周辺にみられ、丘陵地は、田万川から須佐地域にかけての臨海部に比較的なだらかに広がっている程度で、大半を山地が占めている。また、日本海にはいくつもの離島が点在し、4つの有人離島を有している。河川は、北部では田万川が田万川地域と須佐地域の山間部の大半を流域として、中部では大井川が福栄地域の一部を流域として日本海に注いでいる。また、南部では阿武川が山口市北部を源として蔵目喜川、佐々並川、明木川の支流を集め、市街地の広がる三角州により松本川と橋本川に分かれて日本海に注いでいる他、須佐川等の川が直接日本海に注いでいる。

萩市周辺の主な山岳は、長門市境にある日尾山(標高521m)、美祢市境にある鯨ヶ岳(標高616m)、高羽山(標高621m)、美祢市・山口市境にある西鳳翳山(標高742m)、山口市境にある東鳳翳山(標高734m)、大將山(標高644m)、滑山(標高649m)、権現山(標高653m)、島根県の益田市との境にある周應山(標高405m)、三ヶ岳(標高358m)などがある。

これらの山岳のほかに、萩地域の椿東地区には田床山(標高373m)、椿地区には三角山(標高354m)、北部海岸線近くの高地上には直径30mの噴火口跡がある笠山(標高112m)があり、橋本川の河口近くには、国の天然記念物に指定されている指月山(標高143m)もある。

三角州内は、今でも江戸時代の地図がそのまま使え、江戸時代から戦前期までの建物が約1,600棟、基礎石・水路石垣・石橋・門等の工作物が約1,000基、土塀・石塀・生垣等が約2,300も残り、近世の文化財が溢れている。



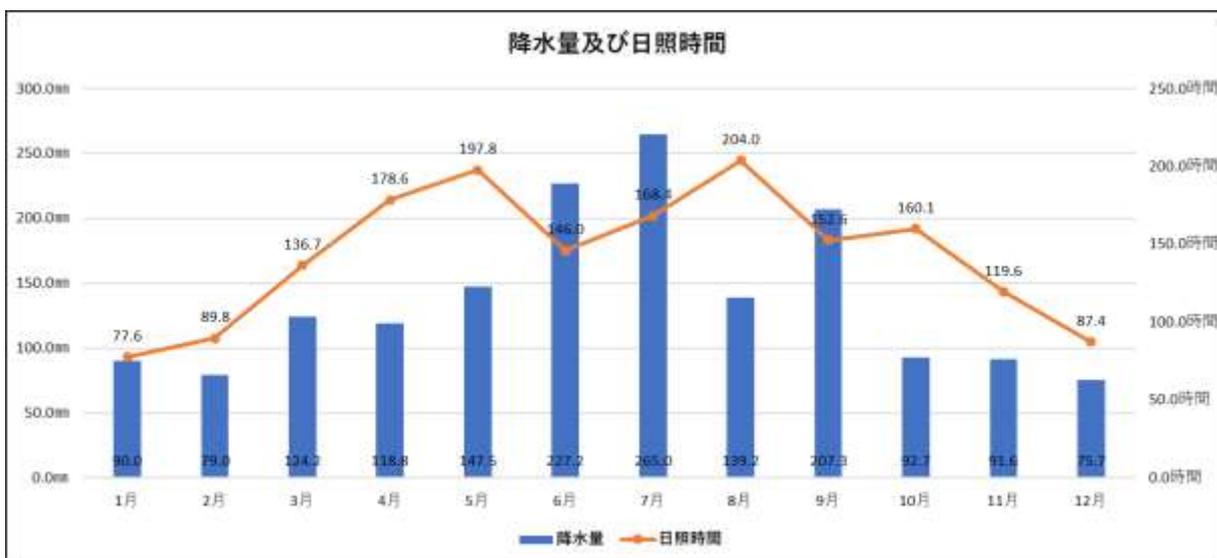
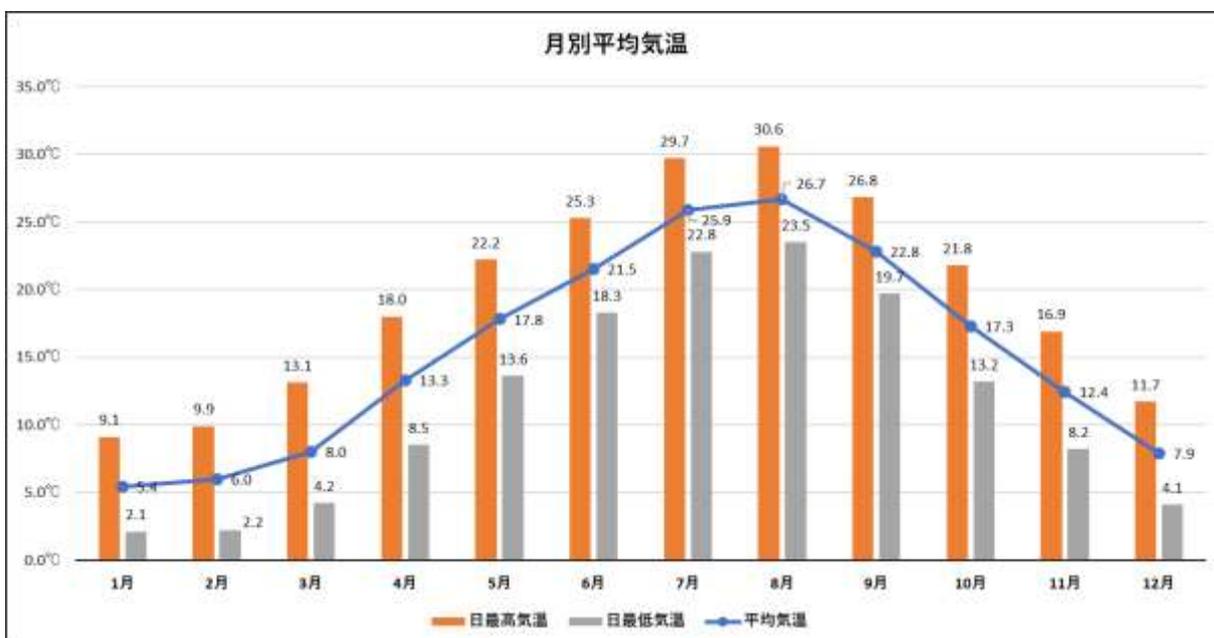
萩に存在する建築物、土塀や石垣、樹木、生垣等の分布図 資料:「萩ものがたり vol.4」

(3) 気象

萩市の気候は年間を通じて比較的温暖で、四季それぞれに応じた情緒を醸し出している。特に1月から3月頃には、日本有数の^{かきやまつばきぐんせいりん}笠山 椿 群生林の椿が真紅の花をつける。また、土塀からのぞく夏みかんの白い花が咲く5月頃は、その花の香りで街全体がほんのりと包まれる。

過去の気象状況(昭和56年(1981)～平成22年(2010))を見ると年間平均気温は、15.5℃、最高気温は37.9℃、最低気温は-6.8℃となっており、年間降水量は1,658mmとなっている。

また、月別の気象では、8月の平均気温が最も高く26.7℃、1月の平均気温が最も低く5.4℃となっている。降水量がもっとも多いのは7月で、総量で265mmと年間降水量の約6分の1を占めている。



資料：「気象庁のデータ：S56～H22」の数値を基に作成

2. 社会的環境

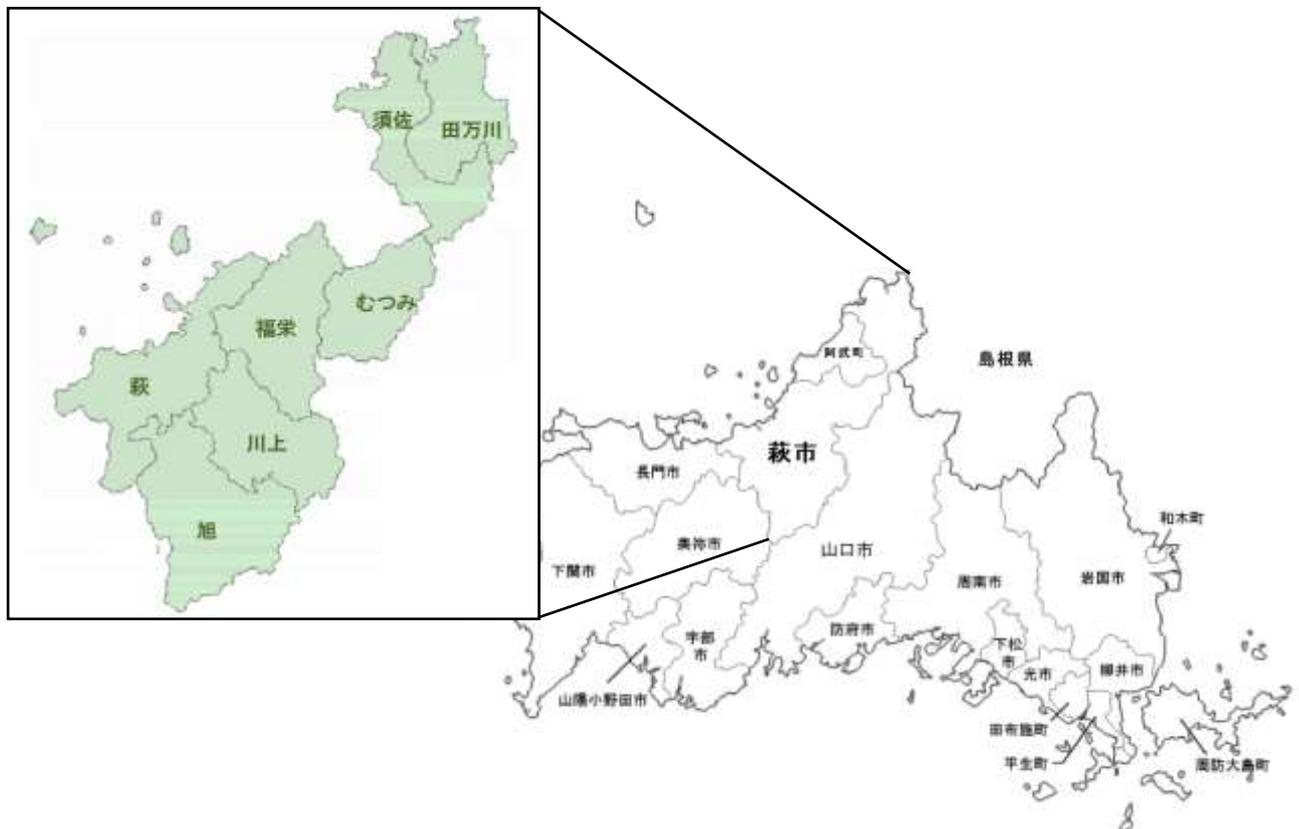
(1) 市の沿革

古くは日本書紀にもみられる長門国^{ながとのくに}の五郡の一つ「阿武郡^{あぶぐん}」にさかのぼる。10世紀前後には長門国阿武郡は周防国^{すおうのくに}とともに後白河院の知行^{ごしらかわいん ちぎょう}する阿武御領^{あぶごりょう}と呼ばれるようになり、東大寺の再建の際には東大寺造営料国として用材の切り出しが行われ、阿武川・大井川流域にはそれにまつわる言い伝えも残されている。

城下町として栄えた萩は、慶長9年(1604)、居城を広島から萩に移した毛利輝元^{もうりてるもと}が、三角州に城下町を建設し、以来、文久3年(1863)に藩府が山口に移るまでの260年間、毛利36万石の城下町として発展した。幕末には、吉田松陰^{よしだしょういん}をはじめ明治維新の原動力となった人材を数多く輩出した。

明治に入り、萩藩と徳山藩が統一され山口藩となり、山口・豊浦・岩国・清末の4藩が山口県として統合された。

明治22年(1889)の「明治の大合併」で、阿武郡内に22町村が誕生し、その後、いくつかの町村統合がなされ、昭和30年(1955)には「昭和の大合併」が行われた。この2つの市町村合併により、現在の萩市の基となった旧萩市^{かわかみ}・川上村^{たまがわ}・田万川町^{すさ}・むつみ村^{すさ}・須佐町^{すさ}・旭村^{ふくえ}・福栄村が編成され、平成17年(2005)3月6日には、1市2町4村が合併し、新「萩市」となり、現在に至っている。



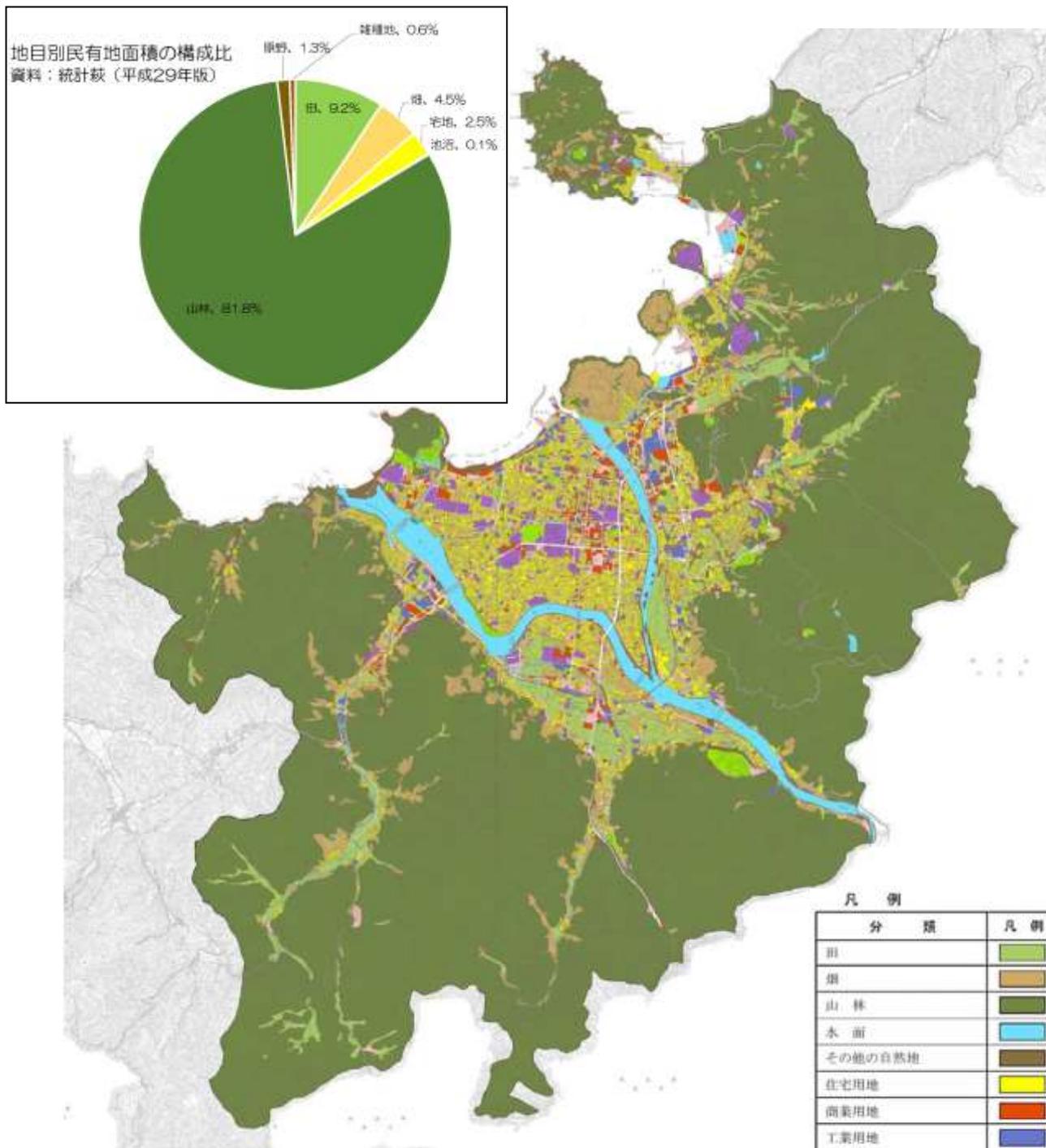
【沿革】

年号	明治		大正	昭和		平成		
地域	明治22年			昭和30年		平成17年		
萩地域	川島村	北古萩町						
	土原村	細工町						
	橋本町	塩屋町						
	御許町	恵美須町						
	唐櫃町	瓦屋町						
	江向村	米屋町					萩町	
	河添村	東田町						
	平安古町	西田町					萩町 大正12年	萩市 昭和7年
	堀内村	津守町						
	南片河町	上五間町					萩市	
	南古萩町	下五間町						
	呉服町	吉田町						
	油屋町	古萩町						
	古魚店町	今古萩町						
	春若町	熊谷町						
北片河町	浜崎新町							
樽屋町	浜崎町							
今魚店町	東浜崎町							
	樽郷東分村	樽郷東分村	樽郷東村 大正10年					
	樽郷西分村	樽郷西分村	樽郷村 明治43年					
	山田村	山田村						
	三見村	三見村						
	大井村	大井村						
	大相島	大島村						
	尾島							
	櫃島							
	羽島							
	肥島							
	見島	見島村						
川上地域	川上村	川上村						
田万川地域	上田万村	田万崎村		江崎町 昭和15年	田万川町	萩市		
	下田万村							
	江崎村							
	上小川東分村							
	上小川西分村						小川村	
	中小小川村							
下小川村					昭和31年 境界変更 (江津・尾浦 須佐町より)			
むつみ地域	片俣村	高俣村			むつみ村			
	高佐上村							
	高佐下村							
	吉部上村	吉部村						
吉部下村								
須佐地域	須佐村	須佐村	須佐町 大正13年		須佐町	昭和31年 境界変更 (江津・尾浦 田万川町へ)		
	弥富上村	弥富村	須佐町					
	弥富下村							
	鈴野川村							
旭地域	明木村	明木村			旭村			
	佐々並村	佐々並村						
福栄地域	福井上村	福川村			福栄村			
	福井下村							
	黒川村							
	紫福村	紫福村						

資料：「ふるさと萩のすがた」

(2) 土地利用

萩市の土地利用状況を地目別民有地面積で見ると、山林の利用が最も多く 35,041ha で全体の 81.8% を占めている。田の利用は、3,950ha (9.2%) であり、畑 (1,909ha、4.5%) と合わせ、耕作地としてみると 13.7% となる。



資料：「萩市緑の基本計画」

分類	凡例
田	緑色
畑	茶色
山林	濃緑色
水面	水色
その他の自然地	茶色
住宅用地	黄色
商業用地	赤色
工業用地	青色
公益施設用地	紫色
道路用地	白色
交通施設用地	灰色
公共空地	黄緑色
その他の公的施設用地	黒色
その他の空地	赤色
用途地域指定区域界	赤線
都市計画区域境界	黒線

(3) 人口動態

人口は昭和40年(1965)には約84,000人だったが、その後は減少傾向にあり、平成27年(2015)では49,560人となっている。世帯数については、人口減少に反して増加傾向にあったが、平成17年(2005)に減少に転じ、平成27年(2015)では21,620世帯となっている。また、1世帯当り人員も減少を続けており、一世帯当りの平均人数については、昭和40年(1965)で3.97人であったのが、平成27年(2015)では2.29人となっており、核家族化や高齢者の独居世帯数が増加していることがうかがえる。

年齢別人口構成では、昭和40年と平成27年を比較すると、年少人口が約5分の1近くまで減少している一方、老年人口は2倍以上に増加しており、人口減少とともに少子高齢化が進んでいる。また、生産年齢人口は、昭和60年から年々減少を続けており、同様に比較すると、2分の1以下に減少している。



資料：「国勢調査」の数値を基に作成

(4) 交通機関

①道路

萩市の東西に走る国道 191 号線は、萩市と北浦の各市町（益田市・長門市・阿武町）を結ぶ主要幹線道路で、市街地の中心で国道 262 号に連結している。国道 262 号は、椿地区でバイパス的な役割の旧萩有料道路（平成 22 年（2010）度から無料化）につながり、萩・山口間の所要時間が短縮され、利便性が高まっている。平成 23 年（2011）に小郡・萩間の地域高規格道路や萩・三隅間の自動車専用道路が開通し、周辺地域の移動が今まで以上にスムーズになっている。

②鉄道

萩市における鉄道は、JR 山陰本線が東西に通っている。駅は 9 つあり、中心駅である東萩駅は、昭和 48 年（1973）に城下町にふさわしいデザインに改築された。鉄道利用者の大半は通学する高校生で占められており、東萩駅以外は無人駅となっている。

③バス

バス路線は、東萩駅と新山口駅を 60 分で結ぶ、防長、JR バス「スーパーはぎ号」が、平成 29 年（2017）に 4 便から 8 便に増便され、都市間移動の利便性が向上している。

平成 12 年（2000）4 月より、市民・観光客の利便性向上と観光・医療・福祉サービスの拡充を図るため、市内の主要拠点を結ぶコミュニティバス「萩循環まあーるバス」が運行されている。平成 17 年（2005）4 月からは、総合事務所や診療所等の地域の拠点を結ぶ「ぐるっとバス」が運行されている。

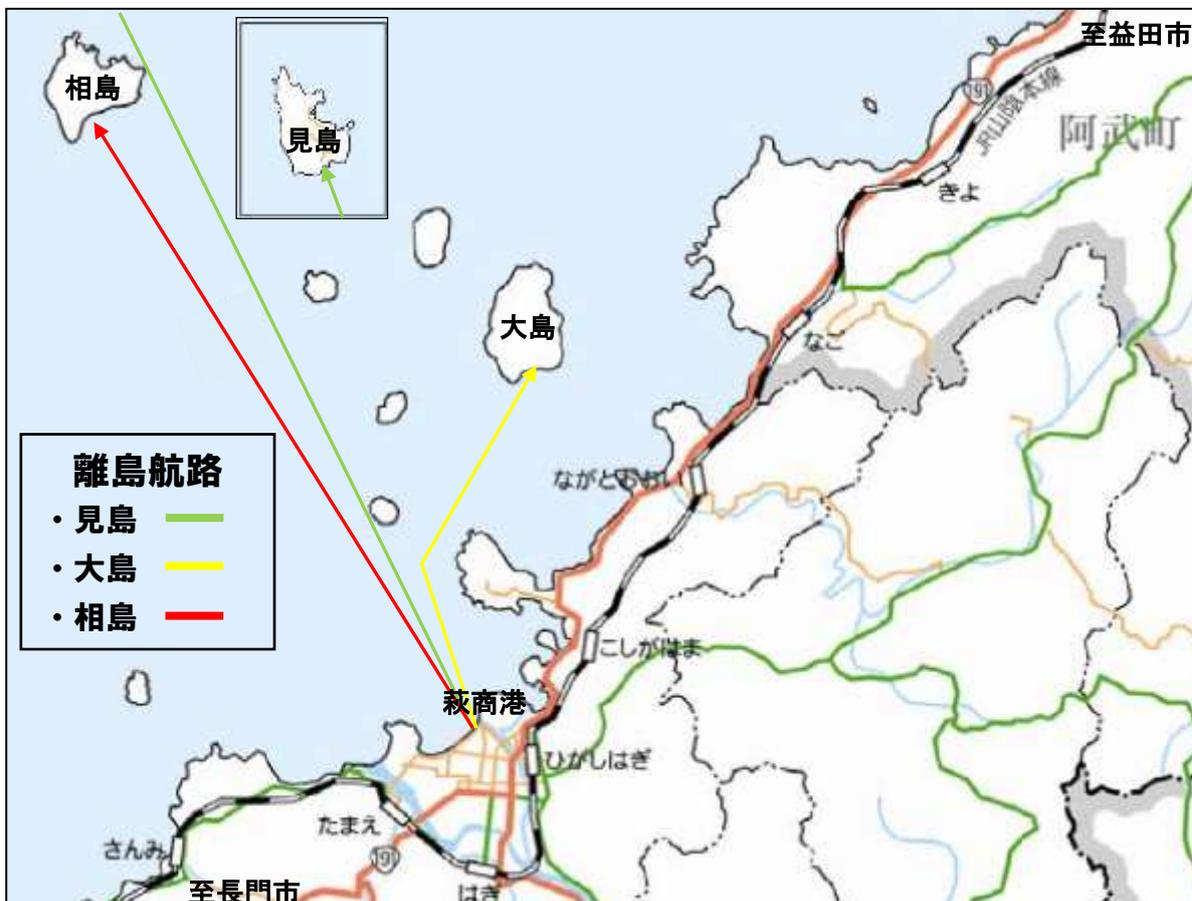
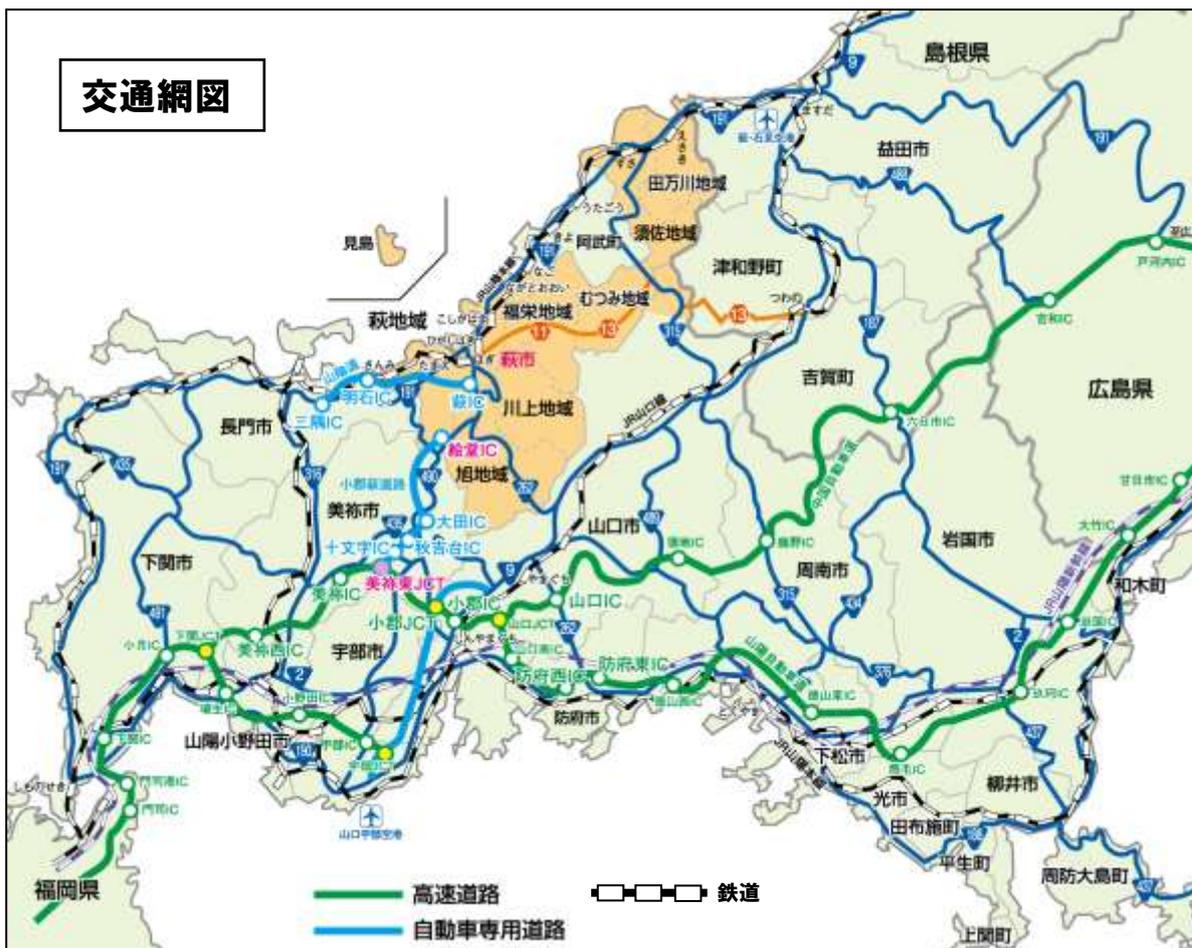
萩市全体の公共交通体系を抜本的に見直し、人口減少社会においても持続可能な公共交通体系を再構築するため、「地域公共交通網形成計画」を平成 31 年度（2019）中に策定予定。

④空路

山口宇部空港（山口県宇部市）と萩・石見空港（島根県益田市）があり、萩市役所から乗合タクシーなどでそれぞれおよそ 1 時間半、1 時間の距離で結ばれている。

⑤離島航路

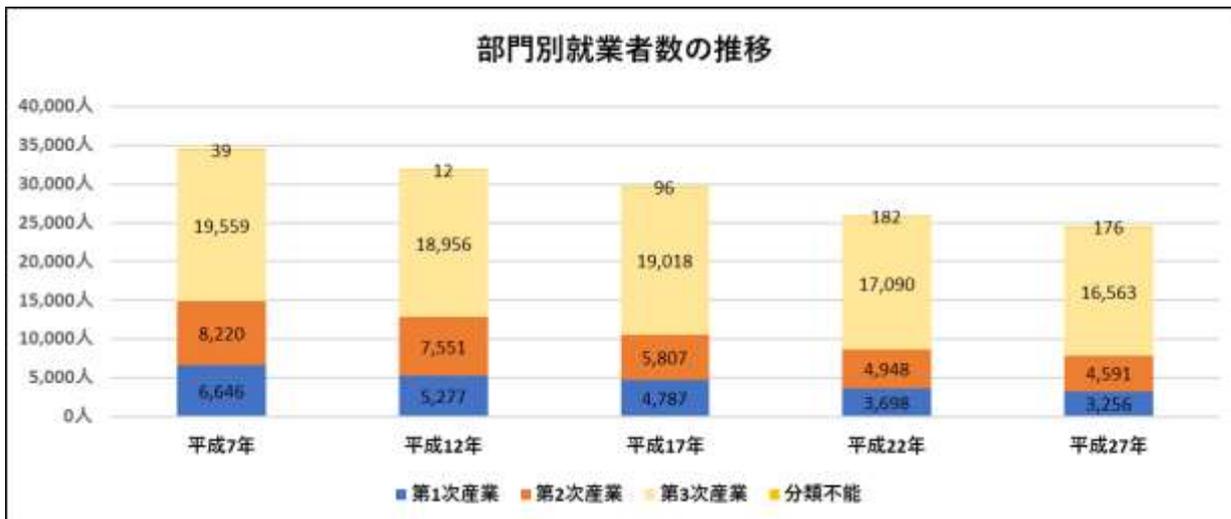
萩市には大小多くの島があり、見島・大島・相島には萩商港より航路が設定されている。大島離島航路で運航していた船舶「たちばな 2」の老朽化に伴い、大島島民の生活の利便性の向上を図るため、平成 25 年（2013）4 月 1 日から新船「はぎおおしま」が運航している。また、平成 10 年（1998）より就航している見島航路船舶「おにようず」の老朽化に伴い、平成 31 年（2019）4 月から、新船「ゆりや」の運航が始まる。



(5) 産業

①産業別にみた人口構成

萩市の産業別就業者数は、以前より農林水産業が主幹産業であったため、全国、山口県と比較して1次産業の割合が高くなっている。平成27年(2015)の産業就業者数は24,586人(就業率49.6%)となっており、第1次産業と第2次産業の就業者数は、平成7年と比較すると大きく減少している。第3次産業は、平成17年(1995)まで概ね横ばいで推移してきたが、平成22年(2010)以降は減少傾向にある。



資料：「平成29年版統計萩」の数値を基に作成

②農林業

萩市は農林業が盛んな地域で、米の他にも野菜や果実、工芸作物(収穫後、加工して利用される農作物)の生産が目立っており、林野率も、山口県内の8つの農林事務所の中で萩農林事務所管内は1番高い82%となっている。しかしながら、農業就業者数、兼業農家において減少傾向にあり、専業農家についても平成7年(1995)をピークに減少している。

農業就業者数は、平成7年(1995)の5,970人に対して平成27年(2015)には2,337人まで減少しており、約半数の規模になっている。農家数についても、平成7年(1995)4,577戸あったものが、平成27年(2015)には2,727戸と4割減少している。

経営耕地面積は平成27年(2015)で2,105haであり、田が1,602haで8割を占めている。



資料：「平成29年版統計萩」の数値を基に作成

③漁業

萩市は、日本海に面し、変化に富んだ海岸線と相島^{あいしま}、大島^{おおしま}、また、沖合 45km に見島^{みしま}を有し、周辺には天然礁（海底から突き出た岩山等）が点在して、対馬暖流の影響を受け好漁場が形成されており、古くから沿岸漁業とともに、東シナ海などのトラフグ等を中心とした遠洋延縄漁業（1本の幹縄に多数の枝縄（これを延縄と呼ぶ）をつけ、枝縄の先端に釣り針をつけた漁具を用いた漁法）の基地として栄えてきた。近年、外国漁船との漁場の競合や資源の減少などにより遠洋延縄漁業は撤退したが、萩市では、沿岸で年間を通じて多種多様な漁業が営まれており、山口県で最も沿岸漁業が盛んな地域となっている。しかし、漁業就業者及び漁業世帯数はともに減少傾向にあり、あわせて高齢化が進行している。



資料：「山口県の漁業 2013 漁業センサス調査報告」の数値を基に作成

④工業

萩市の工業は、地理条件からこれまで大規模な企業進出は見られず、農漁業を活かした食料品や飲料等の加工業及び萩焼に代表される窯業を中心として発展してきた。平成 26 年（2014）では従業者 4 人以上の事業所が 100 箇所、従業者数 1,826 人、製造品出荷額等 226 億円と小規模である。工業の推移をみると、事業所数は年々減少しているが、製造品出荷額等は平成 23 年（2011）に大きく減少した後、平成 24 年（2012）から増加傾向になっている。

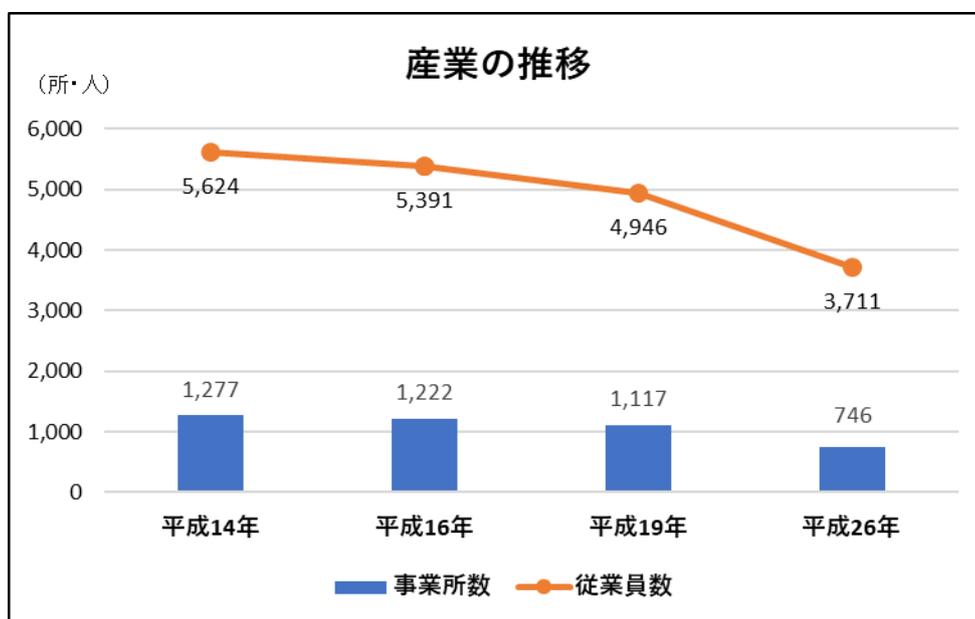


資料：「平成 29 年版統計萩」の数値を基に作成

⑤商業

城下町として発展してきた萩市は、今も「樽屋町」^{たるやちょう}「米屋町」^{こめやちょう}「塩屋町」^{しおやちょう}など、昔ながらの地名を残している。また、江戸時代の商業の中心は、現在の呉服町周辺であったといわれているが、御許町^{おもとまち}周辺、椿東地区^{ちんとう}、椿地区^{つばき}に広い駐車場を持つ大規模な小売店が進出し、その周囲には多くの専門店が集まり、商業の中心地となっている。

萩市の商業は、年々減少しており、平成26年(2014)では事業所数746所、従業員数3,711人、年間商品販売額732億円となっている。人口減少や長引く景気低迷、大型店との競合、経営者の高齢化と後継者不足等、厳しい状況が続いている。中心商業地の既存商店街においても、空き店舗がみられるようになっている。



資料：「平成29年版統計萩」の数値を基に作成

⑥観光

萩市の観光は、美しい自然と城下町のたたずまい、明治維新にゆかりの史跡等数多くの文化財に恵まれ、重要伝統的建造物群保存地区に市内4か所が選定されるなど、今なお江戸時代の城下町の町並みをとどめている。さらに、平成13年(2001)環境省によって、「かおり風景100選」にも選ばれた夏みかんと土塀、武家屋敷の織り成す風物と市内に散在する萩焼の窯元は、萩の情緒をより一層魅力的なものにしている。また、海岸線は長門市の青海島とともに、北長門海岸国定公園に指定されており、日本海に点在する大小の島々と海岸線の美を一望できる笠山、雄大な景観を誇る須佐ホルンフェルス有し、国の名勝及び天然記念物に指定されている須佐湾、菊ヶ浜や瀬越、湊、長磯、深まてかたなど多くの海水浴場がある。笠山の北端(虎ヶ崎)には、10haの広さの中に約25,000本のヤブツバキが自生する椿群生林があり、紅葉や溪谷美のすばらしい川上地域の国指定の名勝長門峡、や平成3年(1991)農林水産省によって、「美しい日本の村景観100選」にも選ばれているむつみ地域の伏馬とそこに広がるひまわりロード、雲海のきれいな平蕨台など景観に恵まれている。その他、萩博物館、歴史資料館や萩アクティビティパーク、須佐湾エコロジーキャンプ場をはじめとするキャンプ場、むつみ昆虫王国、観光農園などの観光施設、西日本最多の7カ所の特色ある道の駅が整備され、その上、海の幸、山の幸、川の幸などの豊富な食材がある。このように、自然の作り出した美しい景観と明治維新胎動の舞台となった町並み、豊富な食材に恵まれたこの萩は、全国的にも有名な観光地であり、毎年全国から多くの観光客が訪れる「観光の町、萩」として知られている。

萩市を訪れる観光客の総数は、平成19年(2007)以降は増減を繰り返しながら減少傾向にあったが、平成27年(2015)7月に「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産に登録されたこともあり、平成27年(2015)は300万人を超える観光客数となった。

平成29年3月には、萩藩校明倫館跡地に建つ旧明倫小学校(昭和10年(1935)開校)を、観光の起点「萩・明倫学舎」として保存整備した。萩藩校明倫館の伝統を受け継ぐ歴史ある校舎で、藩校や世界遺産などの展示資料により、萩の歴史、文化、自然を学ぶことができる。

また、平成30年9月には、“大地と人のつながり”をキーワードに「地球の視点で『萩らしさ』が見える”伝わる”まち」をビジョンに掲げ、日本ジオパークネットワーク正会員加盟が認定された。



資料：「平成29年版統計萩」の数値を基に作成

3. 歴史的環境

(1) 中世以前

(縄文時代～古墳時代～平安時代)

萩では旧石器時代の遺物はまだ確認されておらず、縄文時代や弥生時代の遺物や遺跡は、大井(萩地域)を中心に、見島(萩地域)など数カ所で発見されている。

特に大井の宮の馬場遺跡では、弥生土器や石器が数多く発見され、かなりの数の人々が生活し、文化が栄えていたことが分かる。



見島で発見された縄文土器(萩博物館蔵)



霧口で発見された弥生土器「壺」(萩博物館蔵)



大井で発見された石製品「石斧」(せきふ)(萩博物館蔵)

大井では多くの古墳や石棺が発見されている。このことから、弥生時代に続き、大井が文化の中心として栄え、豪族とよばれる有力者が勢力を振るったと考えられる。

特に昭和4年(1929)にJ R山陰本線敷設工事に伴って発見された円光寺古墳は、直径30m前後で6世紀初頭～中頃、古墳時代後期築造の円墳と推定されており、主体部からは、当時の豪族の華やかな暮らしをしのばせる勾玉・管玉・環頭太刀柄頭・鉄鏃・土器片等が多く発見された。これらのうち、めのう製勾玉3個、碧玉製管玉1個、耳環2個、環頭太刀柄頭3個が現存し、萩博物館に収蔵されている。とりわけ、環頭太刀柄頭は、径約6cmの環頭に鳳凰文を配したもので、県内には他に3カ所の古墳から出土している。古墳時代における大陸との交渉や防長地域の政治的動向をうかがう上で、その資料的価値は大きいと考えられる。また、隣接するむつみ地域や田万川地域にも、円光寺古墳と同じ時期・様式の古墳がある。



県指定の文化財 円光寺古墳出土品(萩博物館蔵)

聖徳太子の時代以降、国の中央では仏教が栄え、奈良時代になるとさらに地方へと広がり始めた。大井川下流に残る大寺跡、阿武川下流の上野光安寺遺跡などの寺院跡は、昔、萩地方で仏教文化が繁栄していたことを偲ばせている。大井大寺の塔の心礎（建物の中心となる柱の下になる石）とよばれる石で、上に立てた柱がずれないように丸いくぼみが彫られている。くぼみの直径が1mもあることから、この石に立てられた柱や、それを中心として建てられた塔がかなりの大きさであったことが分かる。



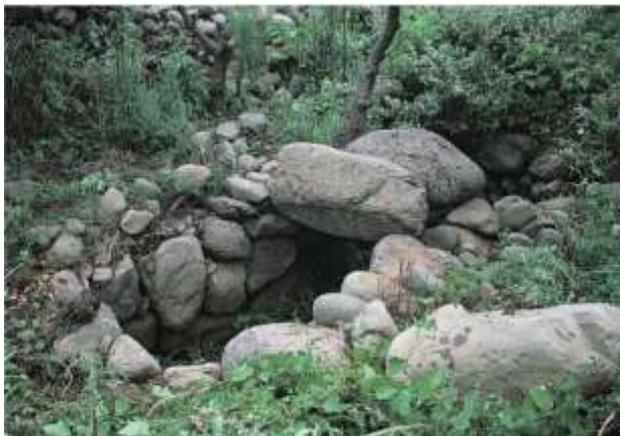
大井大寺の心礎



上野光安寺跡から発見された軒丸瓦(のきまるがわら)
(萩博物館蔵)

見島ジーコンボ古墳群は、7世紀後半から10世紀初頭にかけて造られたもので萩沖約45kmの海上に浮かぶ見島の古代遺跡である。この古墳群は、本村地区の東方、高見山から晩台山に至る横浦海岸一帯に、長さ300m、幅50mから100mにわたって分布している。大きな石や小石を積み上げてつくられた積石塚と呼ばれる形の古墳が200基ほど集まっている。

海浜の比較的大きな玄武岩を用いて造られた積石塚で、その分布密度は高く、全国でも稀な群集墳（密集度の高い古墳群）である。見島の地理的状況に加えて、墓の数が多いことや武器類、装身具類、銭貨類などが出土したことから、埋葬されているのは朝鮮半島からの侵入に備えて駐留していた武人の集団で、中央の文化を持っていたと思われる。



国指定の文化財 見島ジーコンボ古墳群



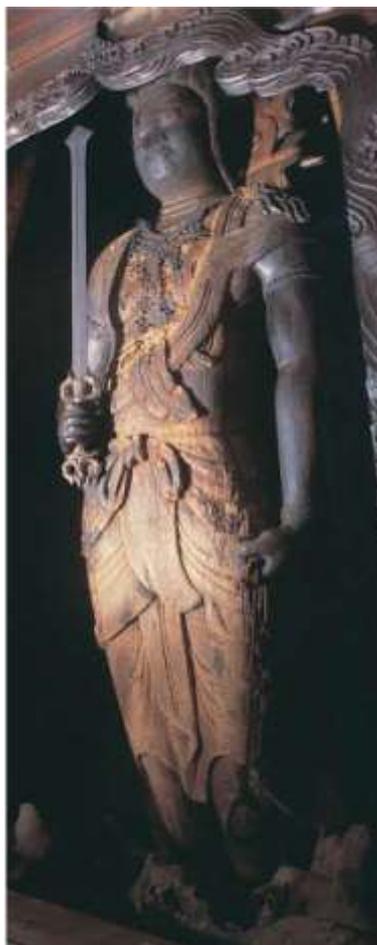
県指定の文化財 見島ジーコンボ古墳群出土品
(萩博物館蔵)

平安時代には、中国や朝鮮半島の文化を消化し、日本の風土や生活感情に合った国風文化が発達した。しかし、藤原氏が政治を独占し始めた平安時代中期から社会不安が起こったため、死後に極楽浄土に生まれ変わることを願う浄土信仰が広まった。

萩に残されている彫刻や^{きょうづつ}経筒も浄土へのあこがれを示すものが多く、平安時代の世相をよく反映している。



重要文化財
木造 千手観音立像
なんみょうじ
(南明寺蔵・椿)



県指定の有形文化財
木造 不動明王立像
ちようじゆじ
(長寿寺蔵・北古萩)



県指定の有形文化財
木造 釈迦如来坐像
だいしやういん
(大照院蔵・椿)

(2) 中世

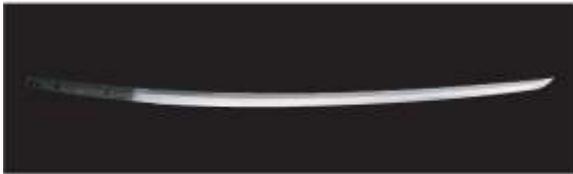
(鎌倉時代～室町時代～安土・桃山時代)

源頼朝が鎌倉幕府を開き、江戸時代まで約700年続く武士による政治の基礎をつくった。

志都岐山神社の太刀や大照院の赤童子立像には、武士の時代らしい力強さが感じられる。

鎌倉時代に、日本は元から2度の攻撃を受けたが、国を挙げて立ち向かい、また、暴風雨の影響もあり元軍を退けた。大井には、この元寇の時に元の船が碇に使ったといわれる石が残されている。この石の中程には綱を結ぶためのくぼみがつけられている。この碇石は、元寇の遺物としては我が国の最北端に位置しており、その点からも貴重な考古資料といえる。

また、同じく大井の鶴山海岸の石垣は、元軍の上陸を防ぐためにつくられた石塁の跡といわれている。



重要文化財

太刀 銘延吉(のぶよし)

(志都岐神社蔵、萩博物館保管)

重要文化財

太刀 銘光房(みつふさ)

(志都岐神社蔵、萩博物館保管)



国指定の有形文化財

木造 赤童子立像

(大照院蔵)

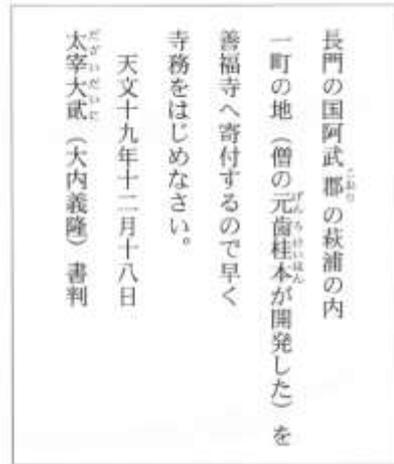


市指定の有形文化財

元寇の碇石

(大井・馬場)

室町時代の終わり頃、大内義隆が善福寺ぜんぶくじに与えた寄進状きしんじょうの中に「萩浦」の名称が見られる。「萩」という地名が現れるのはこの頃からである。当時、地元の武士たちは、自分の領地を守るために各地に小さな城や砦を築いていた。



大内義隆寄進状(善福寺蔵、萩博物館保管)

安土・桃山時代は、活気に溢れた時代であり、このような気風は文化面にも反映されている。

常念寺じょうねんじの表門は、豊臣秀吉が京都に築いた聚楽第裏門を毛利輝元がもらい受け、常念寺に寄進したもので、桃山時代の豪華で雄大な気風が感じられる。常念寺表門の軒瓦のきまるがわらには、軒丸瓦のきひらがわらの間にある軒平瓦の形と、軒平瓦の中の図案にこの時代の古い様式がみられる。また、表門内部の彫刻に見られる五七の桐は豊臣家の家紋で、このことからこの紋が豊臣秀吉から与えられたことが分かる。



重要文化財 常念寺表門(下五間町)



常念寺表門の軒瓦



表門内部の彫刻

(3) 近世

慶長5年(1600)、天下分け目の関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元は、徳川家康から周防・



毛利輝元肖像(萩博物館蔵)

長門(今の山口県)の2か国、36万石の領地を与えられた。それまで、毛利氏は、安芸・備後・(今の広島県)、周防・長門・石見・出雲・隠岐(今の島根県)、備中(今の岡山県)の半分と伯耆(今の鳥取県)の半分、合わせて112万石もの領地を持ち、広島に城を築いて治めていた。広島から防長2か国に移ってきた毛利輝元と家臣たちは、領地の中心となる城と城下町をつくる必要があった。そこで、輝元は防府の桑山、山口の鴻峯、萩の指月山の3つの候補地を選び、江戸幕府に相談して、萩の指月山に城を築くことに決定した。城づくりは慶長9年(1604)から始まり、翌年には家臣達に屋敷を割り当て、商人や職人を集めて町づくりにとりかかった。現在では萩の町は、松本川と橋本川に囲まれた三角

州の上につくられているが、当時この辺りは大部分が沼で、葦の生えた水たまりで、川上から萩までは竹や木が茂り、堀内(萩地域)から浜崎(萩地域)までは松原であった。町づくりは、このような竹や木を払い、松を切って根を掘り起こし、その土地を埋め立て道路や屋敷地をつくることから始めなければならなかったため、多くの人々の労力を必要とした。萩城三の丸であった堀内は身分の高い武士の屋敷に割り当てられた。平安古町・江向(萩地域)もほとんど武士の屋敷に当てられた。一方、町人は浜崎町、細工町、吉田町、熊谷町、瓦町(萩地域)などに職業ごとにまとまって住むことになった。戦闘に備えることが城下町の大きな役割であったため、丁字路や鍵曲がつくられた。



萩城下町絵図(明治2年(1869))上に行政区を示している

三角州と外部を繋ぐ橋も、当初は橋本大橋だけであったため、平安古や堀内から玉江方面(萩地域)に行くには渡し船を使っていた。こうして城下町萩は、防衛上は強い機能を備えることとなったが、低湿な三角州で、恒常的に洪水対策を行う必要があったため、城下町の整備の中で藍場川・新堀川等が開削された。これらの水路は、洪水調整のみならず、人や物資の運搬経路・農業用水・防火用水・生活用水等にも利用され、街路とともに近代以降も市民の生活基盤として利用継承されてきた。

文久3年(1863)4月、藩府を萩から山口に移したことで、萩城はその役目を終えることとなる。明治6年(1873)、新政府から萩城の払い下げ令が出たため、その翌年、天守閣を始め、矢倉や城門など全ての建物が解体された。現在、城跡は指月公園として多くの観光客が年間を通じて訪れ、市民が憩う場となっている。



萩城天守閣(明治初め頃)

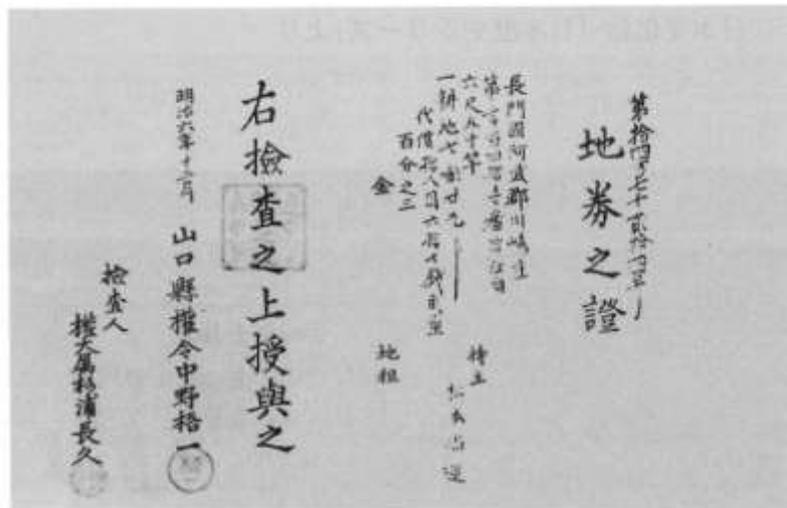


現在の萩城(史跡)

(4) 近代

明治4年(1871)7月、廃藩置県により防長両国を併せて「山口県」、吉敷郡山口町に山口県庁が置かれた。萩、岩国、豊浦に支庁が置かれ、萩支庁は江向の勘場で事務をとっていた。

明治6年(1873)の徴兵令によって士族はその身分も職も失った。同年、政府は財源を確保するために、地租改正を断行した。重い年貢にあえいでいた農民たちは、地租改正に期待したが、地価の3パーセントという重い地租(ちそ)に再び苦しめられた。



「地券」明治政府が発行した土地所有の権利書
 ※当時の1円は現在の1万円に相当(萩博物館蔵)

さらに明治9年(1876)8月の太政官布告により禄制の全面廃止(秩禄処分)が行われた。これまでの家禄を失い生計の道を断たれた士族(旧武士階級)には金禄公債証書(政府の出した証書、年々利子が支払われる)が渡された。しかし、その利子だけでは到底生活ができないため、下級役人や教師・農業・商業を営む者もあったが、多くは落ちぶれていき、その上、帯刀などの特権も取り上げられた。

このようにして士族の不满が高まり、各地で反乱が起きた。萩でも明治9年(1876)10月、明治新政府で参議・兵部大輔を務めた前原一誠らによる萩の乱が起きた。翌年2月、西郷隆盛の主導で起きた西南戦争は、最大で最後の士族反乱であった。

生計の道を断たれた士族の援護救済は大きな社会問題となった。特に萩では全人口の40パーセント以上が士族で占められていたこともあり、その救済は困難を極めた。

そのため、山口県では授産局(のちの就産所)を設け、士族に職を与える授産事業を進めた。授産事業には養蚕・製糸・夏みかん・木綿織物・運輸・養鶏など多くの種類があり、その他士族の移住、開墾、職業補導なども行ったが多くは失敗した。現在、萩市の特産品である夏みかんの栽培は、この当時の授産事業の一環として始められたものであり、これを積極的に推進したのが小幡高政であった。

(5) 現代

明治 22 年 (1889) の「明治の大合併」では、阿武郡内に 22 の町村が誕生した。その後、いくつかの町村統合がなされ、昭和 30 年 (1955) には、三見、大井、見島、六島の各村と萩市との「昭和の大合併」が行われた。

昭和 30 年 (1955) から始まった高度成長という大きなうねりの中で、全国の歴史的集落や町並みが失われ始めた時代において、本市は昭和 47 年 (1972) 10 月に市独自の歴史的景観保存条例を制定し、甚大な災害や戦災を免れ市内に残る土塀や武家屋敷を守るため、いち早くその保存に取り組んできた。

昭和 51 年 (1976) には、全国で最初となる国選定重要伝統的建造物群保存地区として、堀内と平安古(萩地域)が選定を受け、平成 13 年 (2001) に浜崎(萩地域)、さらに平成 23 年 (2011) には佐々並(旭地域)が新たに選定を受けたことにより、名実ともに日本を代表する町並み保存の先進地となっている。

平成 16 年 (2004) には、開府 400 年を契機とし、市域全体を屋根のない博物館とみなして、市民と行政が一体となった博物館活動を展開し、有形・無形の遺産を再発見し、ありのままに現地で展示し分かりやすく解説しながら、同時にそれらを根拠にした新たな文化活動の創造や地域の景観づくりを目指す「萩まちじゅう博物館」という壮大な取り組みがスタートした。同年、構想の中核施設として、従来「萩市郷土博物館」を改築移転する形で、萩市堀内の伝統的建造物群保存地区内の大野毛利家の屋敷跡に「萩博物館」が完成した。

明治・昭和の 2 つの市町村合併により、現在の萩市の基となった旧萩市・川上村・田万川町・むつみ村・須佐町・旭村・福栄村が編成され、平成 17 年 (2005) 3 月 6 日には、この 1 市 2 町 4 村が合併し、新「萩市」となり現在に至っている。

平成 21 年 (2009) 1 月に「歴史まちづくり法」に基づく「萩市歴史的風致維持向上計画」の認定を全国で最初に受け、歴史的建造物の保存・修理を計画的に行ってきた。

平成 27 年 (2015) 7 月、世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産—製鉄・製鋼、造船、石炭産業—」は、8 県 11 市の広域に点在する 23 資産で構成されている。

萩市の 5 資産は、1850 年代に、萩藩が自力で工業化に取り組み始めたことを示す具体的な証拠として登録されている。「萩反射炉」、「恵美須ヶ鼻造船所跡」、「大板山たたら製鉄遺跡」は、自力で工業化に取り組み試行錯誤を重ねた物証として、「萩城下町」は工業化を推進した政治・経済・文化の拠点として、「松下村塾」は工学教育の必要を説いた先駆的存在として、重要な意味を有すものである。



史跡 萩反射炉(世界文化遺産)

平成 29 年 (2017) には、萩藩の教育や人材育成の中枢を担った萩藩校明倫館 (史跡) の跡地に建てられていた明倫小学校の木造校舎 (平成 26 年 (2014) 3 月まで使用された。) が、明治維新 150 年記念事業の一環として萩市の観光拠点施設「萩・明倫学舎」として生まれ変わった。国の登録有形文化財に登録された本館を含む、旧明倫小学校は日本最大級の木造校舎群であり、現在は萩市の観光の起点として大きな役割を担っている。



萩・明倫学舎 本館

平成 30 年 (2018) は、明治維新 150 年を迎え、「明治維新胎動の地」として、近代日本の扉を開いた先達の歴史を振り返り、維新の精神を風化させることなく、未来につなげていく記念事業を市全域で展開した。

見島航路においては、平成 31 年 (2019) 4 月より、新船「ゆりや」が、平成 10 年 (1998) より就航してきた「おにようず」の老朽化に伴い新たに就航を始める予定である。

※「ゆりや」の由来 (見島に生息する日本国内でも珍しい緑色の貝「ユリヤガイ」に由来している。「ユリヤガイ」は二枚貝として分類されていたが、昭和 37 年 (1962) に見島で初めて生きた状態で採取され、二枚貝ではなく巻貝であることが確認された。)



見島航路新船「ゆりや」のイメージ図

また、平成 26 年 (2014) より日本ジオパーク認定に向けた取組みを開始し、平成 28 年 (2016) の認定見送りを経て、平成 30 年 (2018) 9 月 20 日に日本ジオパーク委員会が開催され、萩ジオパークの日本ジオパークネットワーク加盟 (日本ジオパーク認定) が認められた。



日本ジオパークネットワーク現地審査



萩ジオパーク誕生

(6) 輩出した主な人物

萩市の歴史的風致の形成に深い関わりを持つ人物を以下に記載する。

①伊藤博文（いとうひろぶみ）天保12年（1841）－ 明治42年（1909）



萩博物館 所蔵

幼名は利助、通称は春輔・俊輔（俊介）。号は春畝など。周防国熊毛郡東荷村（山口県光市）の農家に生まれ、父十蔵が萩の下級武士を継いだため伊藤姓を名乗る。来原良蔵や吉田松陰に師事。文久3年（1863）に井上馨（聞多）らとロンドンに秘密留学。翌元治元年（1864）に帰国し、明治元年（1868）5月に兵庫県が誕生するや、初代知事となった。同11年（1879）に大久保利通が暗殺されるや内務卿となり、天皇制の権力機構を確立するため、主にドイツの専制的立憲君主制に学ぶ。帰国後は華族令を改正し、同18年（1886）、初代総理大臣となった（計4回組閣）。日露戦争後、韓国が日本の保護国となるや、38年（1905）、初代韓国統監として京城（ソウル）に赴き、韓国併合の基礎を作るも、ハルビン駅頭で韓国人に暗殺される。

②小幡高政（おばたかまさ）文化14年（1817）－ 明治39年（1906）



萩博物館 提供

藩士祖式家に生まれ、のちに小幡家の養子となる。嘉永3年（1850）家督をつぎ、非常手当表番頭、翌年大組物頭弓役、安政5年（1858）萩町奉行役などを歴任。同年、江戸留守居役に転じ、安政6年（1860）、評定所での吉田松陰への死罪判決申渡しに藩代表として陪席した。明治9年（1876）、辞職して萩に帰り、まもなく土族の救済のため夏みかんの栽培に着手、耐久社を設立して産業化に成功した。また第百十国立銀行（現在の山口銀行）の創立にも加わり、2代目頭取となった。萩市平安古町の旧田中別邸は、もと小幡高政の邸宅で、邸内には小幡自身が明治23年（1890）に夏みかん栽培の苦心を記した石碑「橙園之記」が建つ。

③木戸孝允（桂小五郎）（きどたかよし（かつらごろう））

天保4年（1833）－ 明治10年（1877）

藩医和田家に生まれ、藩士桂家の養子となる。嘉永2年（1849）藩校明倫館で吉田松陰に兵学を学び、江戸へ出て斎藤弥九郎の剣術道場練兵館に入門、蘭学や洋式砲術も学んだ。慶応元年（1865）藩に帰り、藩政改革を推進、藩命により木戸と改姓する。慶応2年（1866）、萩藩の代表として、坂本龍馬の仲介により京都で西郷隆盛と薩長同盟を締結した。明治新政府では参与、総裁局顧問、



萩博物館 所蔵

参議を歴任。内治優先を主張して征韓論に反対する。ついで台湾出兵にも反対し、参議を辞任した。明治8年(1875)、伊藤博文や井上馨らの斡旋で大阪会議に出席し、漸次立憲制を布くという方針で大久保利通と合意し参議に復帰。まもなく内閣顧問となったが、西南戦争中に病死した。来原良蔵の義兄。

④久坂玄瑞(くさかげんずい) 天保11年(1840) - 元治元年(1864)

^{よしすけ}義助とも称す。藩医の家に生まれ、藩校明倫館で学ぶ。安政3年(1856)、17歳で九州遊歴後、吉田松陰に接近し入門。松下村塾で高杉晋作とともに「竜虎」「双壁」と称せられ、松陰から「防長年少第一流」と絶賛される。江戸・京都を往復し薩摩・土佐・水戸の同志と尊王攘夷運動を推進。文久元年(1861)、萩藩論が開国を肯定した「公武合体」に傾くや、激しい反対運動を展開し、翌2年(1862)、「破約攘夷」に転換させた。京都で^{やまとぎょうこう}大和行幸、攘夷親征を画策したが、孝明天皇の怒りを買ひ、同年8月18日の政変で萩藩は京都での地位を失う。失地回復を目指して奔走するが、元治元年(1864)7月19日、禁門の変で敗れ、寺島忠三郎と共に^{たかつかさてい}鷹司邸において自刃し果てた。

⑤高杉晋作(たかすぎしんさく) 天保10年(1839) - 慶応3年(1867)



萩博物館 所蔵

^{いみな はるかぜ}諱は春風。藩校明倫館に学び、安政元年(1854)には江戸で黒船騒動を体験。安政4年(1857)、吉田松陰が主宰する松下村塾に入り頭角を表し、久坂玄瑞と並び「^{しやうもん}松門の竜虎」と称された。文久元年(1861)、藩主世子(世継ぎ)の^{せいし}小姓役として初出仕。12月には久坂や井上馨(聞多)らと品川御殿山に建設中のイギリス公使館を焼き打ちした。しかし自らの富国強兵策が藩に受け入れられぬと知るや文久3年(1863)3月、京都で剃髪、10年の暇を^{とうぎよう}貰い東行と号し萩で隠棲する。ところが同年5月、藩が関門海峡で攘夷を断行するや起用され、下関防御を任されて6月に奇兵隊を結成。軍事力不足を補うため、庶民を動員した点が

画期的だった。勅命を奉じた長州征伐軍に屈した藩政府を打倒すべく元治元年(1864)12月、遊撃隊などを率いて下関で^{おおだ えどう}挙兵。大田・^{おおだ えどう}絵堂の内戦をへて、藩論は「^{ぶ びきようじゆん}武備恭順」に統一される。慶応2年(1866)、再び攻め寄せた長州征伐軍撃退の指揮を小倉口で執るも、下関林家離れで病死。

⑥田中義一(たなかぎいち) 元治元年(1864) - 昭和4年(1929)

^{おろくしゃく}御六尺(藩主の^{かご}駕籠かき)の田中家に生まれ、3歳のとき平安古に移る。13歳の明治9年(1876)代用教員の資格をとり、新堀小学校の教壇に立つが、同年、萩の乱に加わり捕えられる。



萩博物館 所蔵

釈放後は長崎や松山に学び、陸軍士官学校を経て、明治25年(1892)に陸軍大学校を卒業した。日清戦争に従軍後、軍事情勢の探索のためロシアへ赴く。日露戦争では満州軍参謀として、奉天(現在の瀋陽)ほかの会戦の勝利に貢献。その後、全国の青年団を統一し、在郷軍人会の理事長にも就任。大正7年(1918)原敬内閣の陸軍大臣、大正10年(1921)、陸軍大将となった。大正14年(1925)、立憲政友会総裁に推され政界に入る。昭和2年(1927)金融恐慌の渦中に内閣総理大臣となり、支払猶予緊急勅令(モラトリアム)を発行し銀行取り付け騒ぎを沈静化。昭和3年(1928)、第1回普通選挙法を施行する。同年、奉天で張作霖爆殺事件が勃発し、昭和4年(1929)、責任を問われて総辞職したあと急死した。ニックネームは「おら(俺)が大将」。首相在任中に国会議事堂や旧首相官邸の建設も手がけた。長男の龍夫は通産相・文相などを歴任した。

⑦玉木文之進(たまきぶんのしん) 文化7年(1810) — 明治9年(1876)

藩士杉家に生まれ、11歳の文政3年(1820)叔父の玉木正路の跡を継ぐ。幼い吉田松陰の指導にあたる一方、27歳の天保7年(1836)以降、松陰の代理教授として藩校明倫館^{やまがりゅうへいがく}で山鹿流兵学を教授する。天保9年(1838)、御蔵元順番検使役となった。天保11年、部下が不始末を起こしたため非職となる。天保13年(1842)、自宅に松下村塾を創始し、子弟の教育にあたる。のちに藩政に復帰、弘化4年(1847)御手当総奉行^{ししどまごしろう}宍戸孫四郎の手元役、嘉永元年(1848)明倫館都講となり公務多忙となったため塾を廃止。明治2年(1869)隠居、松下村塾を再興し子弟の教育に専念する。明治9年(186)、門人が多数参加した萩の乱直後、玉木家の墓前で自刃した。杉民治(梅太郎)・吉田松陰兄弟の叔父。

⑧藤田伝三郎(ふじたでんざぶろう) 天保12年(1841) — 大正元年(1912)



萩博物館 提供

酒造家藤田半右衛門の四男として生まれる。萩では醤油醸造業を営むかたわら、多くの志士と交わり尊王攘夷運動を支援した。明治2年(1869)商工業発展に尽力することを決意して大阪に出て、軍の御用達に従事。明治12年(1879)、わが国最初の民営の硫酸製造会社を興し、明治14年(1881)には藤田組を設立し社長に就任。明治15年(1882)、わが国最初の私鉄鉄道阪堺鉄道(現、南海電鉄)を開設、翌16年(1883)には大阪紡績会社を設立。鉱山業では秋田県の小坂鉱山をわが国屈指の銅山として再生、岡山県の児島湾干拓など多方面の事業を展開した。社会文化事業では、明治11年(1878)大阪商法会議所(大

阪商工会議所の前身)を創設し、2代頭取に就任。古美術品の収集に力を注ぎ、その収集品は藤田コレクションとして名声が高い。郷里萩にも多額の寄付をなした。

⑨前原一誠（まえばらいつせい）天保5年（1834）－ 明治9年（1876）

藩士佐世家に生まれ、父の出役の関係で幼少期を厚狭郡船木（山陽小野田市）で過ごした。24歳の安政4年（1857）萩に帰り、松下村塾に入門。その後、洋学の修得に励むが、文久2年（1862）脱藩上京し、長井雅楽^{うた}の暗殺を図るなど尊王攘夷運動に参加する。文久3年（1863）の8月18日の政変後、都落ちした七卿^{しちきょう}（1863年8月18日の政変によって京都を追い出された7人の公卿^{くぎょう}）の用掛^{ようがかり}（宮内省その他の役所の命を受けて用務をつかさどった職）となり、元治元年（1864）下関で英・仏・蘭・米の4カ国連合艦隊に応戦した。慶応元年（1865）高杉晋作に協力して藩内戦で諸隊を勝利に導き、用所役右筆^{ようしょやくゆうひつ}となる。その後、干城隊頭取^{かんじょうたい}や越荷方^{こしにかた}などを歴任。長州戦争（四境戦争）では小倉藩の降伏に尽力し、戊辰戦争では越後口総督の参謀として長岡城の攻略に力を注いだ。政府の参議、兵部大輔などを歴任するが、新政府の政策と意見が合わなくなり、翌年、病気を理由に辞任し、萩に帰る。明治9年（1876）、不平士族を統率して萩に挙兵（萩の乱）、敗走して宇龍港^{うりゅう}（島根県出雲市）で捕らえられ、萩で処刑された。

⑩毛利敬親（毛利慶親）（もうりたかちか）文政2年（1819）－ 明治4年（1871）



萩博物館 所蔵

天保8年（1837）、19歳の時に13代藩主となり、將軍徳川家慶から「慶」の一字をもらい受けて慶親と名を改める。村田清風^{むらたせいふう}ら有能な人材を藩政中枢に登用して天保の改革を推進し、藩財政を建て直した。また、嘉永2年（1849）藩校明倫館を移転拡充し、藩士教育にも力を注いだ。文久元年（1861）藩是を「公武合体」とするが、尊王攘夷派の久坂玄瑞や桂小五郎（木戸孝允）らの反対により、翌年「破約攘夷」に転換。文久3年（1863）、藩庁を萩から山口に移すが、8月18日の政変により入京を差し止められる。さらに元治元年（1864）禁門の変を起こした罪により「朝敵」となり、官位・称号を剥奪され、名を敬親に復した。慶応元年（1865）藩内戦に勝利した高杉晋作らの「武備恭順」の方針を支持する。薩摩藩との提携を深めて長州戦争（四境戦争）に勝利し、慶応3年（1868）、討幕の密勅を受け、官位も復旧した。明治2年（1869）家督を世子（世継ぎ）^{もとのり}元徳に譲るまで、32年間の長きにわたり藩主の座にあった。

⑩山尾庸三（やまおようぞう） 天保8年（1837）－ 大正6年（1917）



萩博物館 所蔵

萩藩陪臣（繁沢家の家臣）の家に生まれる。幕末ころは「庸造」と称した。萩に出て繁沢家に^{きぐう}寄寓（仮の住まい）して学ぶ。さらに周防徳山や江戸でも学び、桂小五郎・斎藤弥九郎らの知遇を得た。文久元年（1861）、幕府の船亀田丸（船将・北岡健三郎）に乗り、ロシア・アムール地方を視察して、帰国後は箱館（函館）で武田^{たけだあやさぶろう}斐三郎に師事。同2年（1862）12月、高杉晋作・久坂玄瑞らと、品川御殿山に建設中のイギリス公使館を焼き打ちするという過激な攘夷運動にも参加する。同3年（1863）、井上馨（聞多）らとイギリス・ロンドンに秘密留学。とくに各種工業を研究し、薩摩藩留学生の援助を受けて、グラスゴーで造船技術を学んだ。明治元年（1868）に帰国後は木戸孝允（桂小五郎）の勧めにより新政府に出仕。日本近代化のため近代工業の確立に尽力し、人材育成のため工学寮（現在の東京大学工学部）の設立を提唱した。明治13年（1890）に工部卿となり、以後は参事院議官、参事院副議長、宮中顧問官、法制局長官などを歴任。同31年（1898）に退官後は文墨を楽しみ、特に金魚を愛した。また、盲啞学校の設立にも尽くした。

⑪吉田松陰（吉田寅次郎）（よしだしょういん（よしだとらじろう））

天保元年（1830）－ 安政6年（1859）



萩博物館 所蔵

藩士杉家に生まれ、6歳で山鹿流兵学師範の吉田家を継ぎ、叔父玉木文之進の指導を受ける。19歳で兵学師範として独立し、藩校明倫館で本格的に教授を行う。21歳の時に藩から諸国修業を許され、九州を皮切りに関東・東北・関西へと全国を遊歴。24歳の嘉永6年（1853）浦賀に来航したペリーの黒船を目撃し、翌年、下田で米国への密航を図るが失敗、萩の野山獄に投じられる。安政2年（1855）12月、実家杉家に幽閉され、翌年（1856）3月から近隣の子弟に講義を開始し、松下村塾を事実上主宰。安政4年（1857）、杉家宅地内の小舎を修理して松下村塾の塾舎とし、まもなく十畳半の部屋を増築する。2年10ヵ月の短期間に、全人格でぶつかる指導で久坂玄瑞や高杉晋作、伊藤博文らを育てた。安政5年（1858）、幕府が朝廷に無断で日米修好通商条約に調印したことにより幕政批判を開始。老中間部詮勝の暗殺計画が発覚すると、再び野山獄に投じられた。同6年（1859）、安政の大獄により江戸の伝馬町獄へ送られ、処刑された。杉民治（梅太郎）の弟。

⑪渡辺 蒿蔵 (天野清三郎) (わたなべこうぞう (あまのせいざぶろう))

天保 14 年 (1843) - 昭和 14 年 (1939)



萩博物館 所蔵

藩士渡辺家に生まれ、天野家の養子となるも、のちに渡辺家に復籍した。15 歳の安政 4 年 (1857) 有吉熊次郎^{ありよしくまじろう}の誘いで松下村塾に入る。吉田松陰から「奇物」と期待された。万延元年 (1860) 松島剛蔵^{まつしまこうぞう}の指揮する洋式軍艦丙辰丸の江戸への遠洋航海に参加。久坂玄瑞らの尊攘運動に加わり、文久 3 年 (1863) 奇兵隊に入ったが、元治元年 (1864) 禁門の変で萩藩が敗退後、西洋兵学の修得に励む。慶応 3 年 (1867) 兵学修業のため飯田俊徳^{いいだとしのり}とともに長崎へ派遣され、まもなく藩命により米国留学に出発。さらに英国へ渡ってロンドン大学に学び、グラスゴーで造船技術を修得した。明治 6 年 (1873) 帰国、工部省に入る。長崎製作

所で造船事業の近代化につとめ、明治 12 年 (1879)、東洋一とうたわれた立神^{たてがみ}ドックを完成。明治 16 年 (1883)、日本最大の木造船小菅丸を完成させ、長崎造船局の初代局長となるも、翌年、造船局が三菱会社へ貸与となったため本省に戻った。49 歳の明治 24 年 (1891) に退職し、帰郷後は松下村塾の保存事業に地元代表として尽くした。松陰に学んだ松下村塾生で最も長生きした人物。

⑫井上 勝 (いのうえまさる) 天保 14 年 (1843) - 明治 43 年 (1910)



萩博物館 提供

萩藩士井上勝行の三男として萩城下土原に生まれる。幕末の一時期、野村弥吉と称した。

安政 2 年 (1855)、開明派として知られた父に従い、江戸・浦賀に赴く。同 5 年、藩命により長崎でオランダ士官より兵学を学ぶ。さらに同 6 年、江戸へ出て西洋砲術を修業した後、箱館(函館)で武田斐三郎^{あやさぶろう}に師事し、英国領事館員から英語を学んだ。文久 3 年 (1863) には井上馨^{いのうえかおる} (閻多^{ぶんた})・伊藤博文^{いとうひろふみ} (俊輔^{しゅんすけ}) らとイギリス・ロンドンに

秘密留学。鉱山学や鉄道の実業を学び、明治元年 (1868) に帰国した。木戸孝允^{きどたかよし} (桂小五郎^{かつらこごろう}) の推薦で新政府に出仕し、同 4 年、鉄道頭 (後の鉄道大臣にあたる地位) となって京浜間の鉄道敷設を指揮。翌 5 年これを開通させる。その後も関西の鉄道敷設を指揮し、日本人技術者の実力で逢坂山^{おうさかやま}トンネルを完成させるという快挙を成し遂げた。同 23 年 9 月には鉄道庁長官となる (26 年 3 月退官)。また同年には、貴族院議員にも選ばれた。明治 29 年、汽車製造合資会社を興して社長になるなど、鉄道事業による日本の近代化に尽くしたが、鉄道視察中にロンドンで客死。鉄道の父と呼ばれ、後年、東京駅前に銅像が建立された。

4. 文化財等の分布状況

萩市には古代から近代に到るまでの数多くの歴史上価値の高い建造物等が現代に受け継がれ、それぞれの地域の歴史的風致の形成に寄与している。平成30年(2018)9月末現在、国指定、県指定、市指定の文化財(登録等を含む)が219件ある。このうち、萩市の歴史的風致の中核をなす国指定の重要文化財等文化財である建造物等の総数は34件である。これらは、武家屋敷、藩関連施設、往還路、町家など萩藩の城下町に関連するものと在郷地主の住宅や古墳、峡谷など阿武地域に受け継がれてきたものがある。

また、これらの他に、県・市指定の文化財である建造物等の総数は64件に上る。

加えて、未だ文化財に指定されていない武家屋敷や町家、社寺建築、農家などの他、これらと一体となった門、塀、石垣、水路などの建造物が日常の生活の中で相当数が受け継がれている。長い年月の中で、萩に暮らす人々とその暮らしを見守ってきた文化財は、それぞれの地域の歴史や文化、自然の特色を持っており、今もその地で息づいている。

指定文化財の件数

種類		国指定・選定	国登録	県指定	市指定	合計
有形文化財	建造物	8	8	6	26	48
	絵画	1		1	13	15
	彫刻	3		5	17	25
	工芸品	2			13	15
	書跡・典籍	1		3	3	7
	古文書				1	1
	考古資料			2	2	4
	歴史資料	1		1	1	3
無形文化財	芸能					0
	工芸			1	1	2
有形の民俗文化財		1			3	4
無形の民俗文化財				3	10	13
遺跡		14		4	20	38
名勝地		1				1
名勝地及び動物、植物、地質鉱物		1			1	2
動物、植物、地質鉱物		7		6	17	30
伝統的建造物群		4				4
歴史的景観保存地区					7	7
合計		44	8	32	135	219
記録作成等の措置を講ずべき無形文化財として選択されたもの		1				1

(1) 国指定等の文化財

国指定等の文化財 52 件の内訳は、重要文化財が 16 件、重要有形民俗文化財が 1 件、史跡が 14 件、名勝が 1 件、名勝及び天然記念物が 1 件、天然記念物が 7 件、国選定重要伝統的建造物群保存地区 4 件、登録有形文化財 8 件である。重要文化財は、建造物 8 件、絵画 1 件、彫刻 3 件、工芸品 2 件、書跡 1 件、歴史資料 1 件である。

●国指定等の文化財の概要

【常念寺表門】〔重要文化財（建造物）〕

長栄山常念寺は、浄土宗の寺院で天文元年（1532）の創建と伝えられている。表門はもと京都聚楽第の裏門であったと伝えられるもので、毛利輝元が豊臣秀吉から与えられ、伏見の毛利邸に移築していたものを、さらに輝元が萩城築城前に当寺を宿所にした縁によって、寛永 10 年（1633）常念寺の表門として移築寄進したものである。門の形式は和様四脚門で両袖に潜り戸がついている。屋根は切妻造本瓦葺で、桁行 3.66m、梁間は 3.12m あり、規模的にはあまり大きくないが木割は雄大である。特に木鼻や板蕘股の刳型の力強さ、外にまではみ出した桐・牡丹の蕘股彫刻の豪放さに桃山時代の特色をうかがうことができる。



常念寺表門

【東光寺】〔重要文化財（建造物）〕

護国山東光寺は、元禄 4 年（1691）3 代目藩主毛利吉就が萩出身の名僧慧極を開山として創建した全国有数の黄檗宗の寺院である。

（大雄宝殿）

大雄宝殿は、元禄 11 年（1698）4 代藩主毛利吉広によって建立されたものである。建物は、一重裳階付きの仏殿形式で桁行 19.93m、梁間 14.617m、正面一間通りは吹き放ちになっており、屋根は入母屋造本瓦葺で、棟の中央に宝珠と両端に鯨を置いている。堂内の土間は漆喰叩仕上げで、建物中央部に格子天井を張るなど特色ある唐様建築である。規模の壮大さと相まって、当地方の寺院建築中最高水準を示すものと高く評価される。

（鐘楼）

鐘楼の建築年代は、元禄 7 年（1694）に 4 代藩主毛利吉広によって梵鐘が寄進されているので、そのとき同時に建立されたと思われる。建物の形式は、黄檗宗特有の一重裳階



東光寺(大雄宝殿)



東光寺(鐘楼)

つきいりも やづくり
付入母屋造 二層で裳階部分は^{さんかわらぶき}棧瓦葺、屋根は入母屋造^{いりも やづくりほんかわらぶき}本瓦葺、桁行4.62m、^{はりま}梁間3.65m
である。上層には梵鐘がついてあり、鐘銘は開山^{かいさん}慧極^{えごく}の撰で、萩藩の御細工人、^{いもじぐんじき}鋳物師郡司喜
へ^{えのぶやす}兵衛^{のぶゆき}信安・信之父子が^{いもじぐんじき}鋳造したものである。

(三門)

三門は、東光寺が創建されて121年後の文化9年(1812)10代藩主^{なりひろ}毛利斉熙が寄進したものである。規模は、桁行11.4m、^{はりま}梁間6.5mの2階二重門で左右に上層部へ上るための山廊がある。屋根は入母屋造^{いりも やづくりほんかわらぶき}本瓦葺、中央に露盤付き宝珠を置き、2階には^{びるしやなぶつ}毘盧遮那仏・^{らん}十八羅漢などが安置されている。全体の構造の形式は禅宗様である。規模も大きく地方寺院の三門として見ごたえがある。



東光寺(三門)

(総門)

総門の創建は、元禄6年(1693)の^{えごくひつ}慧極筆(護国山)の^{へんがく}扁額が掲げられているので、そのころ完工されたものと思われる。建物は、三間二戸の八脚門、桁行8.7m、^{はりま}梁間3.12m、一重切妻造、中央高屋根左右低屋根段違い本瓦葺である棟の両端には^{まから}摩伽羅を飾り、^{おうぼくしゅう}黄檗宗特有の形式を示す遺構である。



東光寺(総門)

【菊屋家住宅】〔重要文化財(建造物)〕

菊屋家の祖先は、毛利家に従い広島から山口に移って町人となり、さらに萩城の築かれた慶長年間に萩に移ったといわれ、後には藩の御用達^{ごようたし}を勤めるほか、その屋敷は幕府巡見使の宿として本陣にもあてられてきた豪商であった。

(主屋)

主屋の建築年代は明らかではないが、家に伝わる^{きんこうしょ}勤功書や建築手法からみて承応元年(1652)から明暦3年(1657)までの間に建てられたものと考えられる。桁行13.0m、^{はりま}梁間14.9m、切妻造^{けたゆき}棧瓦葺^{きりづまづくりさんかわらぶき}で居室部は前寄り一間半を「みせ」とし、その奥は土間寄りに役向きの部屋が3部屋設けられている。その上手は東に面して座敷2部屋があり、南寄りに家族の生活の場が間取りされている。全国的に見ても現存する大型の町屋としてその価値は極めて高い。



菊屋家住宅(主屋)

(本蔵)

本蔵は主屋の後方にあり、土蔵づくり^{けたゆき}桁行11.7m、^{はりま}梁間4.8m、二階建、^{きりづまづくりさんかわらぶき}切妻造^{きりづまづくりさんかわらぶき}棧瓦葺土蔵で、建築年代は明治ごろと思われる。

(金蔵)

金蔵は本蔵の後方で、屋敷西側の道路に側面して建っている。桁行 6.1m、梁間 4.2m、2階建て、切妻造棧瓦葺土蔵で、建築年代は、庇吊金物の刻銘から江戸中期から後期のものと思われる。内部には板石囲いの地下室が設けられている。

(米蔵)

米蔵はさらに後方の道路に沿って建っている。桁行 11.8m、梁間 4.0m、切妻造棧瓦葺土蔵で、内部は石敷きの床であるが、以前は床板の建物であった。建築年代は、部材の風蝕^{ふうしょく}度合いや解体・転用の痕跡があることから、19世紀中頃の建物を同世紀末期に修築したものと考えられている。

(釜場)

釜場は、金蔵の東側にある桁行 6.0m、梁間 4.0m、切妻造棧瓦葺の小規模な建物で、北面は吹き放し、ほか三方は土大壁である。建築年代は、部材の風蝕度合いや使用釘から見て、19世紀初め頃の建築と思われる。

これらの家屋は、主屋が極めて古く、蔵その他の付属屋も屋敷構えの一環として重要であり、主屋と数棟の蔵が建ち並ぶ西側の景観は「史跡萩城城下町」の地域内にあつて重要な構成要素の一つをなしている。



菊屋家住宅(全体図)

【萩城城下町】〔史跡〕

萩城城下町は、旧萩城の外堀から外側にあたり、町筋は碁盤目状に画され、中・下級の武家屋敷や町屋が軒を連ねていた。現在でも町筋はそのまま残っていて、よく城下町の面影をとどめている。特に三の丸に通じる中の総門東側の一帯は、町筋とともに家並みの配置の状況がそのまま保存されている。表通りの呉服町筋は御成道で、この通りに面しては萩藩御用達の菊屋家、幕末の商家久保田家などの



萩城城下町(江戸屋横丁)

家々が残っている。表通りから南に向かって西から菊屋横丁・伊勢屋横丁・江戸屋横丁と呼ばれている小路がある。これらの路に沿って高杉晋作旧宅跡、木戸孝允旧宅やなまこ壁の土蔵、門、土塀が連なっていて城下町の景観をしのぶことができる。

【萩市平安古地区伝統的建造物群保存地区】〔国選定重要伝統的建造物群保存地区〕



鍵曲(平安古地区)

選定地区は、橋本川に沿った東西約 150 m、南北約 300mの範囲で、藩政期の地割をよく残している。かつて重鎮の多くは三の丸に住んでいたが、平安古・江向・土原方面の開墾が進むにつれて武家住宅も増えていった。現在この地域には毛利一門の右田毛利家(16,000石余)の下屋敷をはじめ、寄組児玉家(3,084石)、栗屋家(691石余)や大組町田家(66石)などの屋敷跡が今も往時の面影を残している。特に幕

末藩政に活躍した坪井九右衛門(157石)の旧宅は、長屋門付近から土蔵・本邸の式台・庭まわりなどによく旧状を残している。また、この地域には左右を高い土塀で囲み、見通しのきかない「鍵曲」といわれる鍵手形道路が残っている。

【萩市堀内地区伝統的建造物群保存地区】〔国選定重要伝統的建造物群保存地区〕



永代家老 益田家物見矢倉(堀内地区)

選定地区は、旧萩城三の丸地域で、堀内といわれる広さ東西9丁余(約990m)、南北6丁余(約660m)の約55.0haである。藩政時代、藩の諸役所や毛利一門、永代家老、寄組といった重鎮たちの邸宅が立ち並んでいた。現存の建物としては、永代家老益田家(12,000石)の物見矢倉、旧周布家(1,530石)の長屋門、繁沢家(1,094石余)の長屋門、永代家老福原家(11,314

石)の長屋門、口羽家(1,018石余)表門と主屋等がよく旧態をとどめている。明治以降、士族救済のために広大な屋敷跡に植栽された夏みかんが、これら長屋門や土塀などと一体をなし、歴史的な風致を残している。

【萩市^{はまき}浜崎伝統的建造物群保存地区】〔国選定重要伝統的建造物群保存地区〕



浜崎本町筋 旧山村家住宅(浜崎地区)

選定地区は、萩城三角州北東端に位置し、東西約 320m、南北約 530mの範囲で、藩政時代は廻船業と水産加工業で栄えた町であった。地区内には、藩政時代から昭和初期にかけての伝統的建造物が 100 棟以上現存しており、なかでも藩政時代に遡ると推定される主屋や土蔵は 44 棟を数える。

窓の形式は虫籠窓^{むしこまど}や出格子^{でごうし}など建てられた時代によって異なっており、変化ある表構えになっている。藩政時代から近代にかけての伝統的建造物が数多く残り、特色ある歴史的景観をよく伝え、わが国にとっても価値が高いものである。

選定地区は、萩城三角州北東端に位置し、東西約 320m、南北約 530mの範囲で、藩政時代は廻船業と水産加工業で栄えた町であった。地区内には、藩政時代から昭和初期にかけての伝統的建造物が 100 棟以上現存しており、なかでも藩政時代に遡ると推定される主屋や土蔵は 44 棟を数える。

主屋の一般的な形式は切妻造平入二階建てで角地では入母屋造となっている。また戸口は蔀戸や潜り戸の付いた大戸を設けている。

【萩市^{ささなみいち}佐々並市伝統的建造物群保存地区】〔国選定重要伝統的建造物群保存地区〕



旧小林家住宅(佐々並地区)

選定地区は、日本海側に位置する萩城下町と瀬戸内側の三田尻の港を結ぶ萩往還沿いの山間部に位置する。慶長年中に、藩主の休憩する御茶屋を起点に、宿屋としての町並みが成立したとみられる。保存地区の中軸をなす萩往還沿いには、幕末から近代にかけて建てられた茅葺や赤色の石州瓦で葺かれた主屋が建ち並び、周囲の^{たなだ}棚田(傾斜地にある稲作地)を構成する石垣や水路と一体をなす町並みを今も残している。

選定地区は、日本海側に位置する萩城下町と瀬戸内側の三田尻の港を結ぶ萩往還沿いの山間部に位置する。慶長年中に、藩主の休憩する御茶屋を起点に、宿屋としての町並みが成立したとみられる。保存地区の中軸をなす萩往還沿いには、幕末から近代にかけて建てられた茅葺や赤色の石州瓦で葺かれた主屋が建ち並び、周囲の^{たなだ}棚田(傾斜地にある稲作地)を構成する石垣や水路と一体をなす町並みを今も残している。

(2) 県指定の文化財

県指定の文化財 32 件の内訳は、有形文化財が 18 件、無形文化財が 1 件、無形民俗文化財が 3 件、史跡が 4 件、天然記念物が 6 件である。

有形文化財は、建造物 6 件、絵画 1 件、彫刻 5 件、書跡 3 件、考古資料 2 件、歴史資料 1 件である。

●県指定の文化財の概要

【萩学校教員室】〔有形文化財（建造物）〕

萩学校教員室は、明治 3 年萩明倫館を改組して創立された「萩中学」の教員室として明治 20 年（1887）に建てられたもので、萩中学校が堀内に移転した後は明倫尋常高等小学校の教員室や図書館として使用されていた。その後、萩市役所の敷地内に移築され庁舎の一部として使用していたが、昭和 44 年（1969）に現在地に再度移築し修復された。



萩学校教員室

建物の形式は木造一部二階建寄棟造棧瓦葺、玄関は吹き放し、桁行 12.24m、梁間 7.28m で軒廻りは化粧軒、裏天井である。全体に建築当時の外観がよく保存され、その姿も優れていて、萩における明治洋風建築の代表的なものである。

【西堂寺六角堂】〔有形文化財（建造物）〕

湧出山西堂寺は、応永年間（1394～1428）に創建された曹洞宗の寺院で、当時は、さいど 濟度寺といわれていたが、後に西堂寺と称されるようになった。大内から毛利の時代にかけて祈願所として世の信仰があつく、海の中の寺「うきしま 浮島西堂寺」とも呼ばれ、広くその名を知られている。六角堂は、



西堂寺六角堂

その境内にある木造の一面 4.26m、高さ 11m の六角円堂で、寛保元年（1741）の寺社由来によると、「本堂二間半六角」とあり、江戸中期頃には六角堂として建立されていたと思われる。一重裳階付、屋根は宝形造本瓦葺、一面に入母屋造妻入の向拝が付き、向拝の正面は 2.54m、出は 1.77m で、裳階の柱はすべて六角柱であり、内陣とはえび虹梁こうりょうでつながれている。軒は扇垂木となっており、内陣の柱も六角、天井は絵入りの菱格子である。棟東銘に慶応 4 年（1868）とあることから、慶応年間に新古の部材料を用いて現在の六角堂が再建されたと思われる。

【木造釈迦如来坐像】〔有形文化財(彫刻)〕

この像は納衣のうえを着け、左手は膝上いんぞうで印相を結び、右手は肘を曲げて前に立て、右足を外にして結跏趺坐けっかふざしている。像高は2.33mのいわゆる丈六仏じょうろくぶつの古像の一つである。細目の穏やかな螺髪らほつ、伏目の両眼、丸味のある頬の肉どりなど、平安末期の一典型を示すもので、納衣胸前の浅い衣文等えもん、木取りの風が雄大であり、時代の特色がよく表れている。製作は平安末期のものと思われる。もと大椿山歆喜寺の本尊であったが、歆喜寺が中世に荒廃し、その跡地に毛利氏の菩提寺霊椿山大照院が創建されて同寺の釈迦堂に安置された。



木造釈迦如来坐像

【萩焼古窯跡群】〔史跡〕

萩焼古窯跡群は、17世紀初頭から19世紀後半にかけて使用されたと推定される陶磁器窯跡群である。遺跡は、唐人山の西側山麓に開けた通称「坂の浴」に立地し、その周辺は水田や夏柑畑として開墾されている。窯跡は浴口部斜面、北面から南東方向に約100mの範囲にかけて3基、さらに坂屋敷地内1基の計4基が遺存している。このうち3基は水田開作などによる土砂採取のため、窯本体の一部が壊滅あるいは水田下に埋没したと思われる。付近に点在する物もの原はらには製品として焼かれた陶磁片はもとより、各種の窯道具が多量に埋存し、萩焼の細かな技法や「御用窯」の実体を知ることができ、萩焼の歴史的解明にとっても重要である。



萩焼古窯跡群

(3) 市指定の文化財

市指定の文化財 135 件の内訳は、有形文化財が 76 件、無形文化財が 1 件、有形民俗文化財が 3 件、無形民俗文化財が 10 件、史跡が 20 件、名勝及び天然記念物が 1 件、天然記念物が 17 件、歴史的景観保存地区 7 件である。

有形文化財は、建造物 26 件、絵画 13 件、彫刻 17 件、工芸品 13 件、書跡 3 件、古文書 1 件、考古資料 2 件、歴史資料 1 件である。

●市指定の文化財の概要

【旧周布家長屋門】〔有形文化財（建造物）〕

周布家は、萩藩永代家老益田家の庶流で、石見国周布郷の地頭職として周布村に住し、周布を氏としたところから始まる。藩政時代は^{おおぐみし}大組士（武士の身分）の筆頭として 1,530 石余の知行地を長門市渋木に領していた。

この長屋門は同家萩屋敷の表門として、平屋建本瓦葺の建物で、東西の桁行 24.91m、東端から北に折れ曲がった部分の桁行 11.2m 梁間は 3.96m の道路に沿った長い建物である。中央から東寄りのところに 2.46m 幅の門を構えて開き扉を設けている。建物の外観は腰部を下見板張りとし、基礎に見事な切り石積みがあり、上部は白漆喰大壁造である。この長屋門は江戸中期の代表的な武家屋敷長屋の様式を残している。



旧周布家長屋門

【平安橋】〔有形文化財（建造物）〕

この橋は、萩城三の丸の 3 か所の総門（北・中・平安古）の一つである平安古の総門前の外堀に架けられている石橋である。平安古に通じている橋という所から平安橋と呼ばれ、城下町から三の丸に入る南の通路の一つとなっていた。

橋は玄武岩で造られており、吊り桁・定着桁を備えたゲルバー桁橋の構造を持った無橋脚の珍しい橋である。橋桁は全長 6.04m、幅 3.95m、堀底からの高さ 2.5m である。

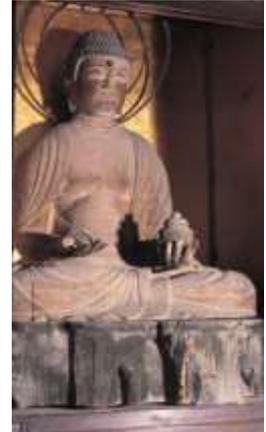


平安橋

慶安 5 年（1652）の萩城下町絵図には木橋として描かれているが、城下の^{しんぼりがわ}新堀川に架かっている石橋がいずれも明和年間（1764～1771）に建築されているところから同時期に石造に架け換えられたものと思われる。

【木造薬師如来坐像】〔有形文化財（彫刻）〕

広厳寺は花園山と号し、曹洞宗に属しているが、もとは天台宗で永享年間（1429～1440）に花園山安養寺として創建され、そのとき薬師堂を建てて薬師如来を安置したと伝えられている。安養寺はその後、荒廃していたが、慶長9年（1604）開山一天大佐和尚により広厳寺として再建された。像は高さ 86.35cm、ヒノキ材の一木造で左手の掌の上に薬壺をのせ、膝は横木を剥ぎ内割を施している。以前は、肘の形からみて、阿弥陀如来であったと考えられる。彩色は後世の補修の際に施されたもので、肉身部分はほとんど剥落して素地を表している。



木造薬師如来像

頭部には螺髪を彫り出し、威厳のある眼の切れの美しさなど面相は優しさの中に力強さをもっている。衣文も流麗で、よく平安期の特色をあらわしている。

【吉田松陰の墓ならびに墓所】〔史跡〕

吉田松陰の墓は松陰誕生地に隣接し、団子岩と呼ばれる小高い風光明媚なところに建っている。墓碑は高さ 0.8m、幅 0.45m、礎石からの高さ 1.6mの花崗岩質の自然石で作られている。表に「松陰二十一回猛士墓」、裏に「姓吉田氏、称寅次郎、安政六年己未十月二十七日於江戸歿、享年三十歳」と刻まれている。



吉田松陰の墓ならびに墓所

松陰の没後百カ日に当たる万延元年（1860）2月7日、生家の杉家では百カ忌を営み、遺髪を埋めて松陰の墓を建立した。墓前には、門人 17 名が寄進して、その名を公然と刻んだ石製水盤、花立、灯籠が備えられている。またこの墓所には、杉家、吉田家、玉木家、久坂家一族と高杉晋作などの墓が立ち並んでいる。